

一、

本書は「韓国歴史学界の異端児」と称せられる尹海東（専門は韓国近代史）の、日本で初めての単行翻訳書である。無論、既に多くの単著が韓国で出版され（『脱植民地主義を想像する歴史学へ』『近代歴史学の黄昏』『植民地近代のパラドックス』『支配と自治』『植民地のグレーゾーン』など）、あるいは個別論文は数多く日本語にも翻訳されてきた。それらがいかに刺激に満ちたものであったのか、挑戦的ともいえる論調がさまざまな論争を惹起してきたことは、のちにのべる。そうしたこともあって、日本において単行本の翻訳が長い間またれていたことは強調されてよいだろう。もっとも、本書は、同じ内容の書物が韓国に存在しているということではなく、尹自身が日本語翻訳書のために選択した論考を集めたものであることには留意しなければならない。この意味では、本書は日本人読者を強く意識した書物であり、日本人読者に対するメッセージ性の強い書物だということである。

では、わたくしはどのようなメッセージを受け取ったのか。唐突だが、最初にこの点からのべておきたい。本書第九章「ジャラパゴス、あるいは孤立した楽園？」において、尹は2009年における国際日本文化研究センター（以下「日文研」）での一年間の滞在の印象評を次のように語っている。「日本での経験が積み重なっていくことにつれて、日文研に対する私の印象には、ある微かな影が落とされていくようになった。（中略）私にとって日文研は次第に、俗な言葉でいえば、『俗世とかけ離れた』世界にみえはじめたのである。（中略）ジャラパゴスは……日本が南米の離れ島のようにみずから孤立して、世界の流れから背を向けていることを指摘する語である」（323、328頁）。既に第八章までを読み進めていたわたくしは、これは一人日文研の問題ではなく、実は日本の人文学・歴史学全体にいえることなのだ、と痛感せざるをえなかった。なるほど、不正を働いた現職大統領を「ローソク革命」で打ち倒した韓国と、同じく不正を働いた可能性のある首相の開き直りを結果として未だ許している日本の違いは、政治の問題に止まらず、人文学など学術の「ジャラパゴス」化と深くつながっていることが痛感させられ、深く嘆息せざるをえなかった。

つまりこういうことだ。「私は『植民地』の子である」（11頁）という印象深い一言から始まっている本書は、のちに紹介する論点も重要だが、徹頭徹尾、現代世界と向き合って叙述されている、この意味では実践的歴史学とでも呼びうる内容だということに注目しなければならない。伝え聞くとところによると、1959年生まれの尹は、朴正熙時代に育ち、ソウル大学校国史科で学び、1980年代には「左翼」の学問的拠点の一つ歴史問題研究所に事務局長として参加。当時の民主化運動にも加わりながら、学問的には「民族主義」の強い影響下で研究を進めた。周知のように1987年に韓国は民主化されたが、1989年の冷戦の終結以後は、近代自体や「民族主義」的歴史学に疑問をいだき、約五年間ひたすら古典からポストモダンに至るテキストの読書・精読に没頭しつつ思考を深めたという。尹の2000年代以降の数多くの業績は、本書所収論文も含めてこうした過程をへて生み出されたものなのだ。わたくしは、尹よりはやや年長だが、1970年代までの日本の大衆運動、1980年代まではまだ影響力があった「左翼歴史学」については多少の記憶があ

る。そして、2000年以降の日本の急速な右傾化には、人文学・歴史学における一見しての著作の量産とは対照的な批判的知性の衰退（「ジャラパゴス」化！）が伴われていたことについても。実は、わたくしが尹と初めて出会ったのは尹が日文研に滞在していた2009年だが、その時点で日本と韓国の歴史学の歩みの間にどれほど乖離が存在していたのか、あるいはその時点に至る韓国歴史学の議論の背景にどれだけ多くの苦闘が刻み込まれていたのか、それらのことに全く無頓着であった自分の姿が想起され、内心忸怩たる思いにとらわれる。

いずれにしても、本書の日本の読者への強いメッセージとは、尹の言葉を借りれば『ジャラパゴス』にならない道、……日本の普遍性を見出し、日本が世界の平和と繁栄に寄与しうる道を模索しなければならない」（329頁）ということであり、現代世界と向き合い、その変革のための批判的知性をいかに研ぎ澄ますべきかについて、韓国の歴史学者から強烈に鼓舞されているということなのではなかろうか。

同時に忘れてはならないことは、尹の「ジャラパゴス」批判とは、かつて帝国としてアジアに君臨し、数多くの惨禍をもたらした日本の、現在の歴史学・歴史認識への強烈な警鐘にもなっているということである。なるほど、本会も担い手の一つであった戦後歴史学は、侵略戦争に対する「反省」から始まったはずである。また、ポストモダンの歴史学についても、日本が東アジアでは真っ先に影響を受けたのも事実であろう。だが、とりわけ21世紀以降の歴史学にどれほど現実の変革を見据えた格闘があったのだろうか。尹が過酷な試練をくり抜けて熟考し到達した地平こそが本書の論点であるとするならば、わたくしも評論的にこれを高見から書評することは許されない。まさしく、現代世界と鋭く対峙する歴史学的実践の一つとして「植民地の子」尹の研究があったとするならば、それにわれわれはどのように応えていくべきなのか、このことを鋭く問うものとして本書は存在している。

二、

最初に本書各章のタイトルと初出について記しておく（第九章以外は、韓国の雑誌論文。この内、第二・四・五・八章は既に日本語にも翻訳されているが、今回本書翻訳者が全て原文から翻訳し直している）。

日本語版序文

第一章 私の近代（『韓国 近代性 研究의 길을 묻다』 돌베개、2006年）。

第二章 植民地認識の「グレーゾーン」（『当代批評』13号、2000年）。

第三章 親日と反日の閉鎖回路からの脱出（『当代批評』21号、2003年）。

第四章 植民地官僚からみた帝国と植民地（『東洋文化研究』第11号、2009年）。

第五章 民族主義は怪物だ（『記憶과 展望』秋号、2005年）。

第六章 韓国民族主義の近代性批判（『歴史問題研究』4号、2000年）。

第七章 申采浩の民族主義（『植民地의 灰色地帯』歴史批評社、2004年）。

第八章 トランスナショナル・ヒストリーの可能性（『歴史学報』200号、2008年）。

第九章 ジャラパゴス、あるいは孤立した楽園？（『日文研』50号、2013年）。

以下、本書のもっとも骨格的主張と考えられる（それ故、日本のわれわれにも鋭く突きつけられている）「植民地近代」「トランスナショナル・ヒストリー（地球史）」を中心に

内容を紹介し、次いでそれと関わる重要な概念である「グレーズーン」「民族主義」について見ていくこととしたい。

先ず「植民地近代」について。この概念こそ本書におけるもっとも重要な概念なのだが、同時に多くの誤解にさらされてきた概念でもある。誤解を回避するためには、「日本語版序文」に言及しなければならない。「私は『植民地』の子である」という印象的一言からそれが始まることについては先に記したが、それに続けて尹のソウル大学校での学問経験が、「追いつくこと」と「隠すこと」という「綱渡り」だったと語られる（それがイデオロギー的にあらわれたとき、尹はこれを「民族主義」とよぶ）。だがこの意味深な言辭もさることながら、「民族主義」歴史学から出発した尹が「普遍主義」に至る道程は、「植民地に立ちかえることだった」という（14頁）。このことは、尹の近現代認識を捉えるときに、とくに重要だ。続けて「植民地は普遍である」「植民地が近代をつくった」とも（後者は本書のタイトルだ）。いうまでもなく、われわれは近代を上位概念とし、近代が植民地をつくった、と考える。だが、この尹の言説は何を意味するのか？「植民地近代」を捉える際には、この問いに何度も立ちかえることを求められることとなる。

さて、「植民地近代」という概念を理解するためには、第一章と第八章がとくに重要だ。第一章では、尹にも強烈な記憶を残したハリウッド映画『戦場にかける橋』での捕虜監視兵として動員されていた朝鮮兵の姿をとおして（そして、それによって朝鮮・韓国をイメージしている現代のシンガポールの人びとをとおして）、『植民地』としての朝鮮が、ただ『植民地としてのみ』とどまっていたわけではなかった」ことを尹はのべる

（29頁）。だが、ここで重要なことは、こうした動員にさらされた朝鮮人の体験は、「被支配と他者への侵略を一つの体に具有する……分裂」（「植民地分裂症」）を示しているに止まらず、それが戦後の韓国社会に継承されていったとされていることだ。何故なら、尹はこの「分裂」を（植民地朝鮮に止まらず）むしろ近代自体の問題と見ているからである（「人間的な侮蔑に耐えた上で同じようなことを他者におこなう近代の野蛮」[32頁]）。

つまり、植民地においても「近代合理性」（マックス・ヴェーバー）は「内面化」されつつあったが、それに根ざしている植民地権力に対しては拒否・抵抗する「分裂」が、この朝鮮兵の姿に、そして戦後韓国社会のさまざまな場面に見出されるとするならば、それこそ「近代の分裂」した思惟そのものだ（ということ、この「分裂」は、発現形態が異なるとはいえ、当然日本でも見出される問題でもある！）。つまり、尹の「植民地近代」は、植民地朝鮮であればこそ、朝鮮兵、満州国官僚となった朝鮮人、戦後韓国社会の様相など、より鋭角的に近代の問題を映し出しているということを主張する概念なのである。しかしながら、尹の「植民地近代」は、「民族主義」に立脚した「植民地収奪論」や「植民地近代化論」を厳しく批判するものとしてあったため、しばしば三つ巴の植民地理解をめぐる議論としてのみ捉えられがちであった（事実、第八章で詳しくのべられているように、「植民地近代」はこれら二者を批判する中で練り上げられた概念であった）。あるいは、尹が上記のように「近代合理性の内面化」云々とのべるので、「植民地近代化論」の亜種であるかのような誤解もあった。だが、本書全体をつうじて理解されるはずだが、「植民地近代」とは、植民地こそが「帝国」「植民地」を超えて近代の全ての人びとに負わせる苦悩（「分裂」）をもっとも顕然化させる場であったという、勝れて近代批判の議論としてあるのである。まさしく、近現代と対峙するためには、「植民地に立ちかえ

らなければならない」。

同時に、「植民地近代」は、第八章で詳述されているように、「トランスナショナル・ヒストリー」と密接に関わって提示されていることも看過されてはならない。実はこのことが理解されていないが故に、「植民地近代」は「植民地近代化論」と混同しての批判にさらされてきた。たとえば、「植民地近代化論」では植民地朝鮮における経済成長を証明しようとして、自立的市場による植民地工業化の遂行を近代化の指標として強調するが（ソウル大学校落星堡経済研究所の研究など）、それは植民地が本国によって強く統制されており、経済主体の内側に差別・分断が存在する不完全な市場であったことを過小評価している、と尹はのべる（282-284頁）。つまり、植民地市場が差別的・階層的世界市場に連動しつつ開かれていたことを見ない一国的な理解が、こうした経済的数量の「誤読」につながっているのであり、それが布置していた帝国や世界経済との構造的連関がほとんど後景に斥けられることとなっていることを、尹は問題としている。一方、「民族主義」的な「収奪論」では、植民地下での政治・社会的権利の制約による経済的不平等＝収奪が強く主張され、独自の市場が形成されはじめたことは否定されている。これに対して「植民地近代」は、植民地における収奪が日常的に行われていたことを前提に、それは近代性と差別が同時に発現するものとして、その意味では世界体制の中で相互に関連して起こる共時的現象の一環であったことを強調する。この点に関する尹自身の説明を以下に掲げる。

「一方は近代的な国民国家もしくは市民社会の形成を、他方は近代的な経済成長をもって近代性の指標として設定するのだが、いずれも近代性に対する一国的な解釈に淵源をもつといわなければならない。その点で、両者は（「収奪」論と「近代化」論の両者は——引用者）ともに近代至上主義から離れることができない。こうして両者は、近代的な進歩という歴史観を共有するものの、『収奪論』は過去の回想という、『植民地近代化論』は現在の不当な追認という過剰解釈に陥ってしまうのである」（286-287頁）。

「西欧と植民地は、同時に発現した近代性の多様な屈折をあらわしており、近代はもう特定の地政学的位置に結びつけて考えられるテーマではない。（中略）『近代はすべからず植民地近代』である。これは、植民地を社会進化論的な文明論の発展段階に準じて下位に位置づけることを拒否する、ということの意味する。このような認識は、植民地が一国的で自足的な政治・経済・社会的な単位ではなく、帝国の一部を成していたということ、そして帝国と植民地は相互作用するひとつの『絡み合う世界』を成していたということをも前提としている。（中略）『植民地近代論』は、帝国と植民地をつらぬく共時性と、植民地とポスト植民地をつなぐ通時性を同時にもつのである。さらに、植民地もまた収奪と文明化・開発の両面を兼ね備えている。要するに、植民地近代という問題意識は、近代の両義性と植民地の両義性が交錯する地点に位置しているのである」（294-295頁）。

見るごとく、ここで尹が強調していることは、植民地支配の帝国と植民地における共時性（「絡み合う世界」）の問題である。帝国の圧倒的優位性と収奪、それにさらされ差別された植民地とは、それぞれが決して単独に存在するものではなく、まさにこの両者を不可欠の構成要素とする近代性、資本主義近代の問題として、さらにいえば現在も続く「ポスト植民地」の問題として、いわばトランスナショナルに捉えられるべき問題として存在しており、「植民地近代」はそれを捉える結節点に位置づけられる概念だというのが尹の主

張である。まさしく、「近代はすべからく植民地近代」であり、ここでも「植民地から考えること」が求められることとなる。

結節点といえば、尹の独自の概念である「グレーゾーン」が重要である。この概念は第二章～第四章で中心的に取り上げられている（なお、「グレーゾーン」は、日本でも『現代思想』30-6号、2002年で紹介され、大いに議論をよんだことは記憶に新しい）。すなわち、従来の植民地時代の理解が二分法（「親日」と「反日」、「従属」と「抵抗」など）であったことを批判する尹は、「グレーゾーン」を「協力」の領域として設定する。つまり、「絶え間なく動揺しながら、協力し抵抗する内面的な姿」（66頁）、そしてこちらが重要だが「政治的なるもの」になりうる「私的なものと公的なものがまじりあう領域」としての「日常」が注目される必要がある、とする。そして、この領域では、「公的領域」「植民地的公共性」は拡大しており、また初等教育や志願兵徴兵制度などを通じて「規律権力」（フーコー）は浸透しつつあったのだという。『植民地的公共性』は、近代化の進展とあいまって規律権力化していく。絶え間なく政治的領域の拡張をこころみながら、そうした努力を通じてすぐさま植民地秩序を維持・強化する権力に陥ってしまうという危機にさらされる二律背反の存在」（81頁）。だが、ここで尹が「規律権力」というフーコーの概念を敢えて用いている意図は、「二律背反」とは別のところにある。つまり、この「植民地秩序」は「重層的ヘゲモニー」関係を伴うものであるにせよ、「帝国主義な知識と権力の一方的な統制でなく、あくまでも相互連関のなかで」構築されていったということがここでも強調されているのである（83頁）。逆にいえば、この秩序は植民地朝鮮の人びとだけに止まらず、「支配者（すなわち日本人）」もまた「植民地の従属民という他者を通じて自己を構成していった」ということだ。「グレーゾーン」という概念は、しばしば「グレー」が注目され、問題の所在を曖昧にしているかのように誤解されてきたが、尹の主張は二分法では捉えられない「植民地と帝国主義」の共時的問題群を摘出する概念なのである。

第三章では、前章で提示された「グレーゾーン」としての「協力」について、尹はその「責任」を厳しく問い詰めている。ここで、尹はマックス・ヴェーバーの「政治と倫理」の議論に従って、「政治的責任」は「結果」を問うものであるにも拘わらず、解放後の韓国では「信念倫理」を中心に「親日」が追及されたことに異議を唱え、とりわけそれが「民族的同一性」という解放後に急速に普及した意識と相即的なものであったとしている。そうではなく、「帝国主義支配の統治行為に対する『協力』行為」（93頁）の「政治的責任」が問われなければならない。だが、解放後の韓国では、「協力」行為は「忘却」され（「ポストコロニアルな記憶喪失」99頁）、「灰色の日常は歴史から排除された」。それが、一方での「民族的同一性」に基づく「親日派清算」の「道徳的定言命令」を際立たせる背景なのだ、とも。尹は「日常」の「協力」を「行政官僚的な領域」「経済的な領域」「宗教的な領域」「文化的な領域」「集合的な運動の領域」「下位地域的な領域」に区分して、それらの研究が重要だとしている。なお、第四章は、近代の「同時性と屈折」を体現している存在として植民地官僚を論じている章だが、これまでの歴史学が「植民地なき帝国」「帝国なき植民地」研究として推移してきたことへの批判として、植民地官僚が注目されている。また、これらの植民地官僚は台湾や満州などの植民地間をまたいだ存在でもあったことから、尹は帝国・植民地・植民地間のトランスナショナルな研究課題として

その研究の重要性を説いているのである。

「信念倫理」の段から、いよいよ「民族主義」「韓国民族主義」が俎上に挙げられることとなる（第五章・第六章）。尹独自の「民族主義」批判が随所に皮肉交じりにのべられている第五章の卓抜した叙述は、（翻訳者の表現力かもしれないが）読者が直接味わってほしい（「民族はイデオロギーとしては失格」で「人間が追求すべき理想の生のあり方を提示する力をもたなかった」[157頁]、「天使の顔」と「悪魔の顔」[156頁]など）。一つだけ言及しておかなければならないのは、「日本と中国が民族主義を捨てないうちは韓国の民族主義も永遠に捨てられることはない」（162頁）状況で、「人間が類的存在、普遍的な存在としての生活を享受できるような新しい人間関係を創出する未来を、実践でもって開いていかなければならない」（165頁）という尹の提起である。それはどのような実践なのか。ここから第六章で中心的にのべられている「韓国民族主義」の特性とその克服をめぐる部分につながってくる。「韓国民族主義」については、「公定国家民族主義」「反体制民族主義」のいずれもが「血統」「種族」と結びついた「原初論的」特徴が著しく、やや乱暴な整理かもしれないが、その有機体論的特質が王権・社会主義（コミンテルン）・共和主義などさまざまなイデオロギーと結合してきたにせよ、「必然的に個人主義の成長を妨げるものだった」と小括されている（190頁）。では、その止揚の方向性は？一つの重いメッセージとして伝わってくるのは（第七章で詳論されている申采浩の姿勢からそれは学ばれたのであろう）、「民族主義」では別の「民族主義」でもある帝国主義と対決できないので、帝国主義と「我」が直接対峙していくべきだという不退転な姿勢、そして「民族主義」を「世界史的な次元で普遍化する」ことによって「空洞化」させていくことである（209頁）。だが、これはどのような具体的実践を意味しているのだろうか？尹は、「分断」を強いられている韓国・北朝鮮の「脱分断」（相互理解）の実践を、その一つの実践として展望しているようだ。こう考えると、「分断」を煽りたてる主張を、「分断」に直接的責任を負っているにも拘わらず他人事のごとき姿勢で叫んでいる日本は、「民族主義」を「世界史的な次元で普遍化」しつつ「空洞化」させる営為からは、あまりに遠い地点にある。そのことを思うと、ほとんど絶望的な思いにとられる。

とはいえ、本書が「トランスナショナル・ヒストリー（地球史）」で締めくくられていることは、日本にあるわれわれにとっても示唆的である（第八章）。われわれは、この提案を受け止めることで、「一国史」「民族主義」の地平を突破するべく既に先を走っている尹に応えられるのかもしれない。やや長くなるが、尹の「トランスナショナル・ヒストリー（地球史）」についての提起を以下に引用しておく。

「人類の歴史、とりわけ近代世界体制の歴史は、一国を単位とするのを前提としてのみ理解されてきたが、それはまさしく近代歴史学の重要な属性でもあった。ところが、国家を乗り越え、国家のあいだを横断し貫通する視角をもたないかぎり人類の歴史を正しく把握することはできない、という自覚から提起されたのが『トランスナショナル・ヒストリー』のこころみである。要するに『トランスナショナル・ヒストリー』とは、一国史を乗り越えようとする代案的な歴史として提起されたのである。（中略）地球史には、次のような問題意識がふくまれていると思われる。第一に、ヨーロッパ中心主義を乗り越えようとするこころみ、第二に、中心に対する周縁の問題提起、第三に、国史（national history）の二分法的な視座を乗り越えようとするこころみ、第四に、地

域史 (regional history) の閉鎖性に対する懸念である。地球史は、近代歴史学の基礎である一国史を乗り越え、ヨーロッパ中心主義を克服し、周縁とマイノリティーを中心に、全地球的な次元から歴史を新たに理解しようとする問題意識をふくんでいるといえる。さらに、人間中心の歴史を相対化することにより、生態史的な問題意識を強化させる点においても地球史研究の意義を高く評価がすることができるだろう。『トランスナショナル・ヒストリー』が地球史の問題意識と混在して使用される場合もあるが、(中略)『トランスナショナル・ヒストリー』は、ナショナルな状況乗り越えたり横断したりするが、ナショナルな状況そのものを無視することはない」(277-278頁)。

無論、近代歴史学(一国史)に慣れ親しんできたものにとって、トランスナショナルな視点から歴史記述を行うことは決して容易なことではない。近代歴史学では「実証主義」的方法が前景化・対自化されることはあっても、「国民史の記述様式」が対自化されることはなかなか困難なことなのだ。トランスナショナルな歴史記述を行っていくためには、このメタレベルでのフレームを問い直す作業を同時に行っていくほかはない。そして、この問い直しのためには、東アジアの人びと、研究者と共同研究を積極的に積み上げていくことが求められている。本書は最終的にはこのことをわれわれに問いかけているのだ。

三、

意外に思われるかもしれないが、尹海東は国史学科での学問的訓練をへた優れた「実証主義」的歴史研究者でもある。植民地朝鮮の「物産奨励運動」の研究を始め、幾つかの地方史研究も行い、また朝鮮共産党・南朝鮮労働党の指導者『朴憲永全集』の編纂にもたずさわっている。日本で紹介されている翻訳論文については、日本人読者向けの配慮からか理論的な問題を扱っているものが多いので、いつの間にか尹を歴史理論の専門家のように捉える向きもあるようだ。無論、本書を始め、歴史理論的な考察は尹が常に怠らないところで、その姿勢からは学ぶところが多いのだが、一方で尹は「実証主義」的な研究を行ってきたが故に、それが「民族主義」や「一国史」を問いえないことを対自化するようになってきたということは強調しておかなければならない。換言するならば、解放後も政治的に激変する韓国にあって、歴史学的実践の「意味」が常に問い返される中で、尹はそれに必死に応えようとしたからこそ、さまざまな歴史理論的な省察にたどり着いたということだろう。そして、この事実を知ったとき、日本の歴史学の現状をどのように考えるべきなのか、わたくしが本書を読み終わって感じたのは先ずこのことである。あまりに明確に思われたのは、尹が「植民地こそ」「植民地から」といったことは、この日韓の歴史学の現況からして既に証明されているのではないかということである。尹が1990年代に苦闘していたとき、「普遍主義」に至る道程は、「植民地に立ちかえることだった」とのべていることを再三紹介してきたが、批判的知性を衰退させているかのごとき日本の歴史学は、どのような実践でそれに応えていくべきなのであろうか。

なお、本書を読みつつ正直いって沸々と湧いてくる疑問もあった(というよりも、疑問を惹起させて歴史理論的思考を深化させてくれたというべきか)。たとえば、韓国での「民族主義」歴史学(「収奪論」)の影響は、日本のマルクス主義系歴史学においても確実に共振しており、その影響も受けたわたくしなどは、やはり植民地朝鮮に「近代合理性」「植民地公共性」を読み取る尹の議論には、どうしても戸惑いを覚える(事実、こうした

批判は日本の歴史学界には根強いらしい)。あるいは、帝国・植民地の「グレーゾーン」に「協力」という概念を提示しつつ、同時に「協力の結果責任」を追求すべきだとする論点は、無論われわれ日本（人）の責任をも鋭く問いかけるものだが、「二分法」だと尹に批判されそうだが）天皇政府・総督府・軍指導部の責任が何よりも問われるべきではないか。申采浩の再評価はアナーキズムに「民族主義」を超える「普遍性」を見出すもののようにも見えるが、現代においても妥当性があるのだろうか、など。だが、これらは「西欧と植民地は、同時的に発現した近代性の多様な屈折をあらわしており、近代はもう特定の地政学的位置に結びつけて考えられるテーマではない」「『近代はすべからず植民地近代』である」「帝国と植民地は相互作用するひとつの『絡み合う世界』を成していた」「『植民地近代論』は、帝国と植民地をつらぬく共時性と、植民地とポスト植民地をつなぐ通時性を同時にもつ」など（294-295頁）、尹の骨格的主張からするならば小さな疑問である。また、近代の共時性が日本・植民地朝鮮の具体的な歴史叙述としてはなかなか浮かび上がってこない側面も感じたが、未だ日韓の自国史同士の交流がほとんどなされていない状況では、本書に責めを負わすべき問題ではないだろう。独学で日本語を学んでいる尹は、既に多くの日本の史料・研究書を精読・分析しているが、今度は日本史研究の側から韓国史研究へ積極的にアプローチすることで克服していくべき問題であることはいうまでもない。なお、第七章の申采浩論は、わたくしの力不足もあってなかなか難解で、本書全体が論理的に大変明快である中では「浮いている」印象があった。そのため十分に紹介できなかったことについては、著者と翻訳者にお詫び申し上げたい。

以上、誤読もあると思うが、著者と翻訳者のご海容を乞う次第である。本書末尾には翻訳者沈熙燦氏による優れた「解題」が添えられており大変参考になったこと、またこの書評に先んじて書かれた岡崎享子氏の書評（『東アジアの思想と文化』第9号、2018年）にも啓発されるところが多かったことも付言しておきたい。